

平成22年度 教員個人評価の集計・分析報告書

佐賀大学 工学系研究科

平成23年11月

目 次

平成22年度教員個人評価について.....	1
1. 教員個人評価の実施状況.....	2
1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など.....	2
1.2. 教員個人評価の実施概要.....	2
1.2.1. 評価組織.....	2
工学系研究科（理工学部）評価委員会ならびに工学系研究科（理工学部）個人評価実施委員会.....	2
1.2.2. 実施経緯、内容、方法等.....	2
1.2.3. 添付資料.....	4
2. 工学系研究科、理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等.....	4
3. 評価領域別の集計及び分析.....	6
3.1. 教育の領域.....	6
3.1.1. 講義担当等に関する事項.....	6
3.1.2. 教育改善に関する事項.....	9
3.1.3. 教育研修・FDに関する事項.....	15
3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項.....	16
3.1.5. 学生の受賞等.....	17
3.2. 研究の領域.....	19
3.2.1. 著書、論文等の発表実績.....	19
3.2.2. 共同研究などに関する活動実績.....	21
3.2.3. 受賞等の実績.....	23
3.3. 国際・社会貢献の領域.....	24
3.3.1. 国際交流実績.....	24
3.3.2. 社会貢献実績.....	25
3.4. 組織運営の領域.....	28
4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価.....	30
4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度.....	30
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム.....	32
4.3. 評価委員からのコメント.....	40

平成22年度工学系研究科評価委員会委員名簿

平成 22 年度教員個人評価について

大学院工学系研究科における教員の個人評価は、各教員から提出された個人目標申告書、活動実績報告書及び自己点検・評価書を基に、大学院工学系研究科評価委員会の下に置かれた大学院工学系研究科個人評価実施委員会において行うこととされ、平成 22 年度分について評価を実施し、その結果を取りまとめたものです。

教員自己点検・評価は、教育、研究、国際交流・社会貢献、及び組織運営の 4 つの領域ごとの活動状況評価と総合評価を、それぞれ 5 段階の評価点を付与して行います。そして、個人評価実施委員会は、教員の資質向上と諸活動の活性化、並びに本学及び本学部の目標達成に向けた活動という観点からそれら評価点の妥当性を点検しました。

平成 22 年度は、工学系研究科博士後期課程に「システム創成科学専攻」を設置し、博士前期課程に「循環物質化学専攻」および「先端融合工学専攻」を設置する改組を断行し、同時に教員組織を博士前期課程 8 専攻講座に置きました。そのため、教員の所属は〇〇専攻講座所属としています。この改組に伴い、工学系研究科・理工学部の教育、研究、国際交流・社会貢献、及び組織運営に関する目標を一新し、それぞれの領域に特徴をもたせた活動に取り組みました。例えば、教育の領域ではラーニングポートフォリオを導入し、教育の質保証の一環としています。研究の領域では、専攻や研究科・学部の壁を越えた学際的な 3 つの研究プロジェクトを 3 年を期限に走らせています。国際交流の領域では国際パートナーシップ教育プログラムおよび学術交流協定の点検を通じたグローバル化を図っています。また社会貢献の一部として「工学系高度人材育成コンソーシアム佐賀」を佐賀県機械金属工業会連合会（194 社）と共に 3 年を期限として設立しました。これらを含めた数々の取組みは、理工学部学士課程教育の質保証、イノベーションをもたらす大学院工学系研究科における教育研究の実践、地域と共にグローバルに歩む工学系研究科を象徴するものであります。このような改革が行えたのは工学系研究科長のリーダーシップを発揮できる組織運営を構築された工学系研究科の教員の革新的な判断によるものであること言うまでもありません。

本報告書には、上記の教育研究活動等に貢献し、顕著な業績を刻んでいる教員の努力が認め（した）められていますし、今後も、継続した活動が教員個々に求められています。本書を手におられる理工学部後援会、佐賀大学同窓会、佐賀大学校友会、卒業生、修了生をはじめとした工学系研究科・理工学部のステークホルダの皆様のご意見等がその原動力になっているものであり、それを基に教員の自己研鑽が不断に図られ工学系研究科・理工学部の発展に資するものと確信しています。皆様のご鞭撻のほど、お願い致します。

工学系研究科長・理工学部長
林 田 行 雄

教員個人評価の実施状況

1.1. 対象教員数、個人評価実施者数、実施率など

大学院工学系研究科（博士前期課程と博士後期課程）所属の教員（教授、准教授、講師、助教）に対して、別紙様式1～4に関して教員個人評価を実施し、一人を除く全員から回答を得た（回答率99%）（平成23.3.31現在）

専攻	対象教員数	実施率(%)
数理科学専攻	10	100
物理科学専攻	15	93
知能情報システム学専攻	17	100
循環物質化学専攻	19	100
機械システム工学専攻	18	100
電気電子工学専攻	17	100
都市工学専攻	23	100
先端融合工学専攻	21	100
工学系研究科（合計）	140	99

1.2. 教員個人評価の実施概要

1.2.1. 評価組織

工学系研究科（理工学部）評価委員会ならびに工学系研究科（理工学部）個人評価実施委員会

1.2.2. 実施経緯、内容、方法等

- ① 平成23年3月9日 工学系研究科評価委員会
 - ・平成23年度教員個人評価の様式を決定した。
- ② 平成23年3月11日
 - ・研究科長は、全教員に対し平成22年度活動の自己点検・評価を依頼し、別紙様式1.3.4を3月14日から4月8日までの間に提出を依頼した。
 - 同時に、平成23年度の各様式もメールにて送付し、別紙様式1（平成23年度活動の「個人目標申告書」）の作成・提出も併せて依頼した。
- ③ 平成23年4月13日 評価委員会開催
 - ・平成22年度教員個人評価のスケジュールを決定した。
 - ・平成22年度教員個人評価集計と分析報告書（様式）について決定した。
 - ・工学系研究科個人評価用集計シート及び理工学部・工学系研究科個人業績集約方法の様式を決定した。

- ④ 平成 23 年 4 月 15 日
- ・「個人評価用集計シート」「個人業績集約の方法」を各専攻長に配布した。
- ⑤ 平成 23 年 4 月 19 日
- ・情報政策委員長から、全教員に対し、評価基礎情報データシステム入力について依頼した。
- ⑥ 平成 23 年 5 月 16 日
- ・「個人評価用集計ツール」を各専攻長に配布した。
- ⑦ 平成 23 年 5 月 24 日
- ・研究科長は、各教員から提出された平成 22 年度の各様式（1. 3. 4）を各専攻長に送付した。また、同時に「平成 22 年度教員個人評価（専攻）集計と分析報告書」の様式も送付し、同報告書の作成を依頼した。（USB メモリーを手渡した）
- ⑧ 平成 23 年 6 月中旬から 7 月末
- ・各専攻長は、別紙様式 1、サーバーにアップロードされた評価基礎情報データシステム及び別紙様式 3 に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、これらを基に評価を行い、評価結果を、別紙様式 4（平成 22 年度の「個人評価結果」）に記載の上、7 月末までに別紙様式 1・3 を含め、研究科長宛に送付することになった。
- また、同時に、各専攻長は、平成 22 年度の個人評価結果について、各専攻の集計と分析を行い、その結果を、「平成 22 年度教員個人評価（専攻）集計と分析報告書」に記載し、研究科長へ提出した（専攻長は、USB メモリーと印刷物（ペーパー）を研究科長へ手渡した）
- ⑨ 平成 23 年 8 月初旬
- ・研究科長は、工学系研究科個人評価実施委員会に対し、個人評価結果の審査を付託した。
- ⑩ 平成 23 年 8 月中旬
- ・同委員会は、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、その結果を研究科長へ報告した。
- ⑪ 平成 23 年 9 月中旬～下旬
- ・研究科長は、別紙様式 1、サーバーにアップロードされた評価基礎情報データシステム及び別紙様式 3「自己点検・評価書」に基づいて、本学及び本研究科の目標達成に向けた活動という観点から審査し、別紙様式 4（平成 22 年度「個人評価結果」）の評価内容を確認し必要があれば、評価結果の補足等及び研究科長コメントを記載することとなった。
- なお、研究科長は、審査にあたり、審査の公平性を確保するために、必要に応じ、他の職員から意見を求めることとなった。
- また、研究科長は、必要に応じ、評価内容について、当該教員から意見を聴取することになった。

- ⑫ 平成 23 年 10 月 3 日
 - ・ 研究科長は、自己点検・評価書に評価結果を記入した別紙様式 4（平成 22 年度「個人評価結果」）を、当該教員に封書で通知した。その際、専攻毎の平成 22 年度教員個人評価集計と分析報告書を添付した。
- ⑬ 平成 23 年 10 月 3 日
 - ・ 各教員は、個人評価の結果に対して異議がある場合は、通知後 2 週間以内（10 月 17 日まで）に異議申立書（様式任意）を研究科長に提出することとなった。
（異議申立書を提出した教員はいなかった）
- ⑭ 平成 23 年 11 月中旬
 - ・ 研究科版の平成 22 年教員個人評価集計・分析報告書（案）を取り纏めた。
- ⑮ 平成 23 年 12 月上旬
 - ・ 研究科長は、研究科版の教員個人評価集計・分析報告書を作成し、工学系研究科評価委員会に対し、本研究科の教員個人評価結果の総合的な検討を付託する。
- ⑯ 平成 23 年 12 月下旬
 - ・ 評価委員会は、本研究科の教員個人評価結果の総合的な検討を行い、同報告書を承認し、その結果を研究科長に報告する。
- ⑰ 平成 24 年 1 月下旬
 - ・ 研究科長は、「教員個人評価集計・分析報告書」を添えて工学系研究科教員の個人評価結果を学長に報告する。

1.2.3. 添付資料

佐賀大学大学評価の実施に関する規則（平成 17 年 3 月 1 日制定）

佐賀大学大学院工学系研究科における教員の個人評価に関する実施基準

「大学院工学系研究科における個人達成目標の指針」（教員用）

個人目標申告書（別紙様式 1）

教員報告書（別紙様式 2）：工学系研究科・理工学部教員活動実績年次報告書（推奨様式）
に読み替え

自己点検・評価書（別紙様式 3）

個人評価結果（別紙様式 4）

2. 工学系研究科、理工学部教員ならびに職員（教育研究支援職員及び事務系職員）が組織的に一丸となって行った教育研究活動等

はじめに、工学系研究科教員ならびに職員が組織的に一丸となって行った教育研究活動等を以下に示す。

- 平成 22 年度工学系研究科国際パートナーシップ教育プログラム（平成 16 年度より）：
 - 相手国：中国、韓国、インドネシア、タイ
 - 数理科学専攻、物理科学専攻、知能情報システム学専攻、循環物質化学専攻、機械システム工学専攻、電気電子工学専攻、都市工学専攻、先端融合工学専攻の教

員（一部）が参画

- 大学院（工学研究科と農学研究科との連携）国際環境科学特別コース
 - 循環物質化学専攻、機械システム工学専攻、電気電子工学専攻、都市工学専攻、先端融合工学専攻、システム創成科学専攻（後期課程）の教員が参画
- 大学院戦略的国際人材育成プログラム(SIPOP)：
 - 佐賀大学大学院に博士後期課程を有する研究科の教育プログラムである。学術交流協定に基づいて実施されている国際共同研究や国際共同教育を強化し、佐賀大学特有の実質的な国際活動を発展させるために、佐賀大学独自に奨学金制度（佐賀大学奨学金留学制度）を設け、アジア諸国から外国人留学生を博士後期課程に受入れるものである。工学系研究科博士後期課程の教員が参画
- 平成 22 年度佐賀大学短期留学プログラム（SPACE）（平成 13 年度より）：

2009. 10-2010. 9	電気電子工学科	受入教員 2 名（学生各 1 名）
2010. 10-2011. 9	都市工学科	受入教員 2 名（学生各 1 名）
- 高等学校ジョイントセミナー、出張講義等
- 環境美化エコ活動
 - 平成 22 年度省エネルギー活動：夏季ピーク電力の抑制策：7 月、8 月期ならびに 12 月、1 月期の空調断続運転
 - 定期的なキャンパス環境美化デーにおける一斉清掃

3. 評価領域別の集計及び分析

3.1. 教育の領域

3.1.1. 講義担当等に関する事項

表 3.1 に教員の担当科目数（学部、修士）、担当コマ数（半期当り換算）、卒業研究指導学生数、修士特別研究指導学生数、博士研究指導学生数（主指導）を表している。

表 3.1 教員 1 人当たりの講義担当、指導学生数

専攻	職 種	学 部 (教養教育科目を含む)			大 学 院			
		担当 科目 数/ 教員	担当 コマ 数	卒研 学生 指導 数	担当 科目 数/ 教員	担当 コマ 数	修士 学生 指導 数	博士学 生指導 数
数理科学専攻	教 授	4.29	4.00	4.00	2.00	1.70	2.57	0.57
	准教授・ 講師	4.33	4.33	2.00	1.67	1.42	0.67	0.33
物理科学専攻	教 授	6.13	7.31	3.50	2.00	1.75	2.00	0.75
	准教授	4.83	5.88	3.00	2.33	3.33	2.33	0.00
知能情報 システム学専攻	教 授	4.50	3.70	5.17	1.83	1.83	4.33	3.33
	准教授	4.86	5.39	4.43	1.86	2.00	2.86	-
	助 教	2.00	3.43	0.25	-	-	-	-
循環物質化学専攻	教 授	7.20	7.41	3.70	3.30	2.27	4.00	1.50
	准教授	7.30	6.96	4.00	3.46	2.93	2.71	0.14
	助 教	3.00	1.10	1.00	-	-	-	-
機械システム 工学専攻	教 授	4.29	4.76	3.86	2.57	2.00	6.21	1.29
	准教授・ 講師	4.67	5.13	3.00	1.50	1.14	3.00	0.00
	助 教	0.80	1.80	1.40	-	-	-	-
電気電子工学専攻	教 授	3.25	3.27	6.25	2.75	2.79	5.00	1.25
	准教授・ 講師	4.40	5.68	3.00	2.60	2.21	4.70	0.05
	助 教	3.33	6.00	0.67	0.00	0.00	0.33	0.00
都市工学専攻	教 授	4.88	4.67	4.63	2.75	2.09	3.38	1.50
	准教授・ 講師	5.27	6.16	4.00	2.09	2.73	2.73	0.36
	助 教	4.00	4.69	0.75	-	-	-	-
先端融合工学専攻	教 授	4.30	4.38	3.70	3.30	3.29	4.80	1.40
	准教授・ 講師	5.25	6.91	3.63	2.75	3.55	3.88	0.50
	助 教	2.33	5.00	0.67	-	-	-	-

受講生数は教務システムに登録された履修者数
 授業担当コマ数は、半期当りに換算する。（通年 1 コマの科目は 2 コマとする。） 1 科目を
 複数教員で担当する場合は、実働時間とする。

【数理科学専攻】

- 教授、准教授の平均授業担当科目数・コマ数、指導学生数は表 3.1 に示す通りである。教授・准教授とも同程度の科目を担当している。教授が准教授より多く学生を担当している。博士後期課程の主指導の有資格者として博士学生を指導している。また、副指導教員となって、実質指導を行っている教員がいる。

【物理科学専攻】

- 授業負担は、教授が平均で学部 7.3 コマ、修士 1.75 コマになっている。一方、准教授は学部 5.9 コマ、修士 3.3 コマである。どちらかという、准教授が専門性の高い授業を分担しており、教授は基礎的な科目を担当している。教授は准教授より 1 コマ程度授業負担が多くなるように分担することになっているが、逆転しているのは年度の特殊事情によると思われる。
- 平均指導学生数は、教授が学部 3.5 名、修士 2.0 名の指導をしているのに対し、准教授は、学部 3.0 名、修士 2.3 名である。博士後期は教授が平均して 0.75 名を指導している。卒研生（＝学部定員数 40 名）と修士（定員 15 名 x 2 学年 = 30 名）は、年度による偏りはあるが、概ね均等に分担している。
- 物理科学科では、学生が卒業研究に着手できるまで担任制を実施しており、各教員はそれぞれの学年あたり、3～4 名の学生を担当として受け持ち、面談による学習・生活指導をおこなっている。

【知能情報システム学専攻】

- 担当科目数は教授、准教授ともほぼ同等である。しかし、担当コマ数において准教授がやや多く、実質的な教育負担では准教授が多いことが分かる。卒業研究学生／修士学生／博士学生指導数では准教授よりも教授の担当数が多い。ただし、この表には現れていないが、准教授の中には博士学生の副指導教員となって実質指導を行っている教員がいる。また、助教の中には卒業研究学生を主指導している教員もいる助教は主に実験指導を担当している。
- 助教は主に実験、演習科目を担当している。そのため、担当科目数の割には担当コマ数が多い。

【循環物質化学専攻】

- 教授は学士課程（平均：担当科目数 7.20 科目、担当コマ数 7.41 コマ）、大学院博士前期課程（平均：担当科目数 3.30 科目、担当コマ数 2.27 コマ）、卒業研究指導学生数 平均 3.70 名、修士論文研究主指導学生数 平均 4.00 名、博士論文研究主指導学生数 平均 1.50 名である。
- 准教授は学士課程（平均：担当科目数 7.30 科目、担当コマ数 6.96 コマ）、大学院博士前期課程（平均：担当科目数 3.46 科目、担当コマ数 2.93 コマ）、卒業研究指導学生数 平均 4.00 名、修士論文研究主指導学生数 平均 2.71 名、博士論文研究主指導学生数 平均 0.14 名である。
- 助教は主に実験及び演習の指導を担当している。前期後期を通じて 平均 3.00 科目、

1.10 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習や生活相談など）を行っていることが報告されている。

教授と准教授は平等に教育を担当するようにカリキュラムが組まれており、卒業研究の学生数も同じである。助教も卒業研究学生を担当し、卒業研究の指導を行っている。

【機械システム工学専攻】

- 学部の講義については、平均的に准教授が教授より多く担当しているが、教授は大学院の講義を多く担当しており、両方を合わせて考えるとほぼ同等の講義を担当している。
- 助教は機械工学実験Ⅰ，機械工学実験Ⅱ，大学入門科目（創造工学入門）などで実験や演習の指導を担当している。

【電気電子工学専攻】

- 准教授は実験科目を複数の教員で担当しているので、教授よりも科目、コマ数が多い。
- 教授は、准教授よりも卒業研究の指導学生数，大学院科目，コマ数，修士指導学生数が多い。
- 准教授が博士後期課程の副指導教員となって、実質指導を行っている教員がいる。
- 准教授の中には停年退職教授の後を引き受けたために修士指導学生が多い教員がいる。
- 助教は複数の教員と一緒に実験指導を担当している。また，卒業研究の指導を行ったり，修士の副指導教員となって、実質指導を行っている教員がいる。

【都市工学専攻】

- 教授は学部（平均：担当科目数 4.9 科目、担当コマ数 4.7 コマ）、学部指導学生数 4.6 人、修士指導学生数 3.4 人、博士指導学生数 1.5 人である。
- 准教授は学部（平均：担当科目数 5.3 科目、担当コマ数 6.2 コマ）、指導学生数 4.0 人、修士指導学生数 2.7 人、博士指導学生数 0.4 人で、准教授は教授よりも多くの科目を担当している。また、博士後期課程の主指導の有資格者として博士学生を指導している准教授がいる。
- 助教は主に実験指導を担当している。卒研指導学生数は平均 0.8 人で、担当科目数は前期後期を通じて 4 科目、4.7 コマを担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習に関わる生活相談など）を行っている。

【先端融合工学専攻】

- 教授は学部（平均：担当科目数 4.3 科目）、卒研指導学生数 3.7 名、大学院（平均：担当科目数 3.3 科目）、修士指導学生数 4.8 名、博士指導学生数 1.4 名である。
- 准教授は学部（平均：担当科目数 5.3 科目）、卒研指導学生数 3.6 名、大学院（平均：担当科目数 2.8 科目）、修士指導学生数 3.6 名、博士指導学生数 0.5 名である。
- 助教は主に学部の実験指導を担当している。更に、助教は、教授あるいは准教授の指導支援（学生の学習関わる生活相談など）を行っている。

3.1.2. 教育改善に関する事項

教育改善に関し、工学系研究科各専攻の教員は、次のような取り組み、実践を行っている。

【数理科学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 授業アンケートを用いた教育評価・分析の個人 Web 公開（准教授）
- 授業アンケートを踏まえて、演習を取り入れたり、レポートを課す（教授）
- 大学院の講義では、少人数を生かして、習熟度に応じて講義を進めた（教授）
- 微分積分特訓講座の主催・講師（教授、准教授）
- 講義ごとに、重要事項をまとめたレジメを配布した（准教授）
- 夏休みを利用して、学生有志に「保険数学」の講義を14時間行なった（准教授）
- 基礎科学である数学の論理的厳密性を重視して受講生に分かりやすい授業を行なった（教授）

【物理科学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 力学において e ラーニング教材を活用し、講義内容の理解に役立てた。
- 授業評価アンケートだけでなく学生から直接意見を聞くなどして、授業改善に取り組んだ。
- 指導する学生2名がそれぞれ著名な物理学学術論文誌 **Physical Review B** に長編論文を掲載し、論文審査員から非常に高い評価を受けた（教授）
- TA 指導が改善され、TA 担当の実験レポートの質が多少向上した（教授）
- 自習促進と、理解を確認するため、期末以外に中間テストを実施（教授）
- 担当する全ての選択科目で LMS を利用した。相対論では講義ノートと演習問題を公開、宇宙物理学と宇宙論入門（周辺）では講義ノートの公開と講義のまとめを公開、教職科目総合演習では情報に関する基礎的講義の内容を公開した（教授）
- 自作のテキストに付録を新設し、内容を拡充した（教授）
- 出席カードに、毎回質問、疑問点を書かせ、次回からの説明の改善の参考にした（教授）
- アニメーションを含むパワーポイント教材を作成し、LiveCampus によって学生に提供した（教授）

【知能情報システム学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- タブレット PC を導入して、スライドに手書きによる書き込みを行いながら説明を行い、学生の理解向上に努めている（准教授）
- スライドの抜本的見直しを行い、スライド枚数を削減することにより、授業評価アンケートの授業の速さ、話す速さに関する項目の評価を相対的に向上させている（准教授）
- 講義の様子を録画したビデオを公開して学生の復習に役立てた（教授）
- 理解したことを表現させるためにプレゼンテーションを行わせている（助教）

- TA と連携を強めて、学生と教員の質問回答が可能なように e-learning 形式で 2 4 時間質問が可能なようにしている (助教)
- Moodle を用いて講義 HP を運営し、各種のコンテンツ提供、レポートの回収、評価結果のフィードバック等を行っている (准教授)
- 卒業研究のための Moodle コースを設定し、各種の成果物提出、教育コンテンツの提示、学生の研究ノート管理などに活用している (准教授)
- 研究のためのフィールド実験実施、研究環境の整備とゼミでの着眼点を主体に提示し、問題解決を行えるようプログラム開発の方法と数学的モデルの意味を教え、次年度システム入れ替えのためのレクチャーとバックアップを行った (助教)
- レポートを主たる成績判定材料とする科目において、口頭試問的な試験を実施することにより、学生の理解度を成績に正しく反映させることを試みた (准教授)
- 講義はすべて録画して、ストリーミング配信している。また、講義に関する資料や成績情報をホームページ上でユーザ毎に確認できるようにし復習環境を整え、成績不振者に対する面談を行っている (准教授)
- 講義に関する資料や成績情報をホームページ上でユーザ毎に確認できるようにし復習環境を整えている。また、再試験を行う際には、指導者の監視の下、自習を義務付けている。さらに、定期試験前に成績不振者に対する面談を行っている (准教授)
- 理解不足を解消して理解をより深めるために、内容の整理・調整を議論した (教授)
- 毎週レポート課題を出すことにより、時間外の学習を要求した (准教授)
- 復習のため 3 コマ分の講義を行い、ミニテストにより理解度をチェックしている (教授)
- 受講者間の能力差を克服するため、受講者個別レポート課題をさらに工夫する (教授)
- 学生に割り当てた英語文献に関する要約を行わせる際に、Wiki を用いて共同作業を行わせた。これにより、相互の連携が生まれ、成果物の質が向上した (准教授)
- 受講者に対して授業時間外の学習課題を合計 3 回課した。課題は講義 HP から受け取ることとし、講義 HP から採点結果をフィードバックした (准教授)
- CMS を用いて実験資料等の公開と WEB 掲示板による質問回答を行っている。また、グループ発表をさせてプレゼンテーションの基礎事項を習得させた (助教)
- 小テスト、確認テストを通じて復習問題を課すことにより、時間外の学習を要求した (准教授)
- 毎週、具体的に宿題を出し、その内容に関する小テストを行った。また、小テスト・確認テストの成績が悪い学生には、宿題を提出させるようにして、直接面談をしてその内容を確認した (准教授)
- 小テスト・確認テストの詳細な解答と誤答例も公開し、講義をビデオに録画して Web 上で配信して、復習しやすい環境を用意した (准教授)
- ミニットペーパーにより予習および復習の時間を増やした (教授)
- レポート課題に自力解決型の応用問題を課した (准教授)
- 学生からの質問内容を Q A 集の形で公開し、学生全体で共有できるようにした (准教授)

- Moodleを用いて講義資料の配布、質疑応答の対応、学生の学習履歴が追えるようにした（教授）
- 講義 HP を通じた講義コンテンツの提供、レポートの回収、採点結果およびコメントのフィードバック、大福帳を用いた学生の意見・コメントの収集および回答など様々な工夫や努力を行った（准教授）
- e-learningシステムを用いて英文を和訳するだけでなく音声によるヒヤリングを取り入れ e-learning システムの不具合等に対処した（助教）
- 卒業論文を作成するにあたって必要なフィールド実験、プログラム開発を行い、研究グループでの共通的な使用方法を提示した。また、研究グループのゼミにおいての問題点、アイデア、進捗状況、手法とその基礎知識を個別に検討し習得させるための議論を行った（助教）
- 実験にあたり、各問題でのソフトの操作の仕方を事例ごとに WEB で紹介し、基本的なデータベースソフトの使用法と知識を習得しやすいように工夫し提出課題のアドバイスをを行った（助教）
- レポート提出状況の悪い学生は保留とし、教員研究室に呼んで個別指導を行った（准教授）
- 確認テストを毎回行い、フォローを入れた（准教授）
- 小テストやレポートを数回行い、ドロップアウトを防ぐ努力をした（准教授）

【循環物質化学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 前年度の授業評価結果をふまえ、教育内容と方法を見直した結果、満足度が良好となった部分も少なくなかった（准教授）
- 自宅学習時間が不足気味なので、小テストの回数を増やすことで理解度の向上が見られた（教授）
- 授業評価結果を基に次年度以降のシラバスを改定した（教授）
- レポートを課し、理解力の向上を図った（教授）
- 所属学科では効果的な FD のために JABEE 認定を実現したが、本科目においてもこの基準を満たすように教育内容と方法を継続的に工夫しており、少なからず教育の向上及び改善に結びついていると考えられる（准教授）
- 担当部分に関して、前年度の内容と方法の問題点等について見直しを図った上で、演習に取り組みやすいように工夫した授業プリントや教材を作成し、配布した（准教授）
- 単なる暗記をなくすため、試験対策用メモ用紙を作成させ、勉学を促した（教授）
- プレゼンテーションの量を増やすことにより、学生の学習意欲の向上が感じられた。また成績も向上した（教授）
- 授業内容の理解を深めるために Power Point によるスライドを用いて図示しながら講義した（准教授）
- 前年度の内容と方法の問題点等について見直しを図った上で、単にやるべきことを指示

するのではなく、受講生が自発的に考え、取り組めるように誘導することを心掛けると共に、これを実践した（准教授）

- 正規の授業時間を確保すると共に適宜予習や復習のための課題を与えることにより定められた学習保証時間を実現した上で、レポートや試験に基づき厳格に評価した（准教授）
- 担当部分に関して、前年度の内容と方法の問題点等について見直しを図った上で、演習に取り組みやすいように工夫した授業プリントや教材を作成し、配布した（准教授）
- 前年度の内容と方法の問題点等について見直しを図った上で、単にやるべきことを指示するのではなく、受講生が自発的に考え、取り組めるように誘導することを心掛けると共に、これを実践した（准教授）
- 単にやるべきことを指示するのではなく、受講生が自発的に考え、取り組めるように誘導することを心掛けると共に、これを実践した（准教授）

【機械システム工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 演習問題を講義中または宿題として与え、自主的な勉学の動機づけを図った。
- 次回講義内容を予告し、学生の予習を促した。
- レポートの出題、採点による到達度の確認
- CAE を取り入れた解析事例を説明した。
- 各事象の説明を高校物理の場合に置き換えて説明を行った。
- 演習レポートを毎回提出させることで、学習の習熟度を上げて行った。
- クラス分けした小クラスの講義では、演習および期末試験を共通問題としている。
- 演習と一体で授業を進めることにより、講義＋演習（復習）を反復的に行っている。
- 演習と期末試験により、厳格に成績判定を行っている。
- 演習レポートにできるだけ詳細な添削を実施している。
- できるだけ基本問題から応用問題へと連続性を持たせるよう工夫している。
- 実験テーマごとに、その実験に関連した項目について検索・情報収集を行うよう課題を与えている。
- TA の活用により授業時間中に理解不足の学生に対する個別のフォローに努めている。
- 中間試験を実施し、自主学習を促進させている。
- 不定期にレポート課題を課し、自主学習を促進させている。
- Web サイトに講義ノート、演習課題の模範解答を公開し、予習復習ができるようにしている。
- プロジェクタ投影資料のみならず、黒板による板書で詳細な説明を行った。
- 重要な問題を学生自らに解かせた後、解説をした。
- 講義中は内容に質問がないかを常に学生に問いかけた。
- 講義資料をプロジェクタに表示し、同資料を web サイトに公開して自習の助けとした。
- 重要な問題を学生自らに解かせた後、解説をした。
- レポート締め切り前日までに提出されたレポートをチェックし、間違えている場合は再

提出を促した。

- 式の導出過程を丁寧に説明するよう努めた。
- レポート課題は章末問題を中心に出题し、レポート作成法について詳しく指導した。
- 演習問題をプリントした資料を配布し、各自解かせた。
- 板書により詳細な考え方、解き方を提示した。
- 講義中に理解度を確認しながら、講義を進めるよう努めた。
- レポート課題は章末問題を中心に出题し、再度教科書を振り返るように努めた。
- 講義の進行に従って、単元ごとに試験を実施した。
- 構造的考察法および、プレゼンテーション能力の修得につとめた。

【電気電子工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 講義内容、演習の学生への周知と閲覧（教授、准教授、講師）。例えば、複素関数論と放電工学の講義ノートを電子化し、希望の学生に閲覧（講師）や授業用のホームページを作成し、学内限定 Web サーバにアップして公開（准教授）や「プログラミング論および演習」において講義ノートを「情報理論」で講義の補助資料を Web 上に学内のみ公開（講師）
- 実習科目では、レポートのチェック、口頭試問による内容の理解力の向上（准教授、助教）。例えば、延べ 145 名に対して「電気電子工学実験 A」のレポート面談を実施（准教授）や「プログラミング論および演習」において演習課題のレポートを毎週提出させ、コメントを付加（講師）
- 再試験の受験者には、事前の自習を要求している（教授、准教授）。例えば、「情報基礎概論」（B1 対象）と「論理回路」（B2 対象）の再試験受験資格として、事前に課題を与えること（准教授）や「電磁気学 A 及び演習」の再試験受験資格として、課題レポート提出を課すこと（教授）
- 受講生に対し講義ごとの質問票やミニテストの配布とチェック（教授、准教授）
- 講義における学生の発言を促す工夫（准教授）。例えば「電気回路 D 及び演習」や「プラズマエレクトロニクス」において学生に質問を促したこと（准教授）やこれにより「情報基礎概論」（B1 対象／受講生約 100 名）では 39 件の質問を、「論理回路」（B2 対象／受講生約 45 名）では 15 件の質問を授業時間中に受け付けた（准教授）
- 大学院生には学外での研究発表をほぼ義務化（教授、准教授、講師）例えば、発表の事例として電気学会、応用物理学会、シンポジウム、国際会議などに対し、大学院生を複数回発表させている（講師）
- プロジェクタによる視覚化を活用した講義の実践（准教授、講師）例えば、主題科目「プラズマ・放電の科学」はほぼすべてプロジェクタを用いて講義（講師）、「プログラミング論および演習」と「情報理論」において、プロジェクタを用いて講義（講師）
- 学生による授業評価を通じて得られた諸問題に対する教育法の改善の工夫（全教員）、例えば「複素関数論」では授業の進み方が早過ぎるとの評価であったので、工学系として明らかに不要な内容は割愛して、授業進度を調節（講師）

【都市工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 出席カードの活用 ①学生個人用のカード（15 週分が記録可能）を作成、②講義の始めに配布、③終了時に質問、コメント、感想などを書かせて回収、④それぞれに回答、コメントを付して次回の講義で配布することにより、つぎのような効果が期待できる①出欠を取る時間の節約、②出席状況の把握、③教員と学生間のコミュニケーションの確保、④講義に参加していることの意識の醸成（多くの教員が利用）
- 実習や演習科目では、クラスを少人数に分け、技術職員やTAなどのサポートによりきめ細かい指導を実施（准教授、助教）
- 受講生に対し講義ごとの質問票やミニテストの配布とチェック（教授、准教授）
- 学生の発言を促す工夫（講義の途中で一人ひとりに簡単な質問をするなど）（教授、准教授）
- 環境問題に関する最新の話題や有益なインターネットの情報を活用（教授）
- 大規模水害に対する危機管理の問題を氾濫流のシミュレーション結果などを交えて、分かりやすく解説（教授）
- 学生による授業評価の結果を基に次年度に向けた改善点を明らかにし、教育方法の改善を図る（シラバス、講義内容、小テストの内容の検討）（教授、准教授）
- 宿題や演習問題の模範解答を答案返却時に配布し、復習の徹底をはかった（教授、准教授）

【先端融合工学専攻】

教育改善に関する努力として、以下の事項が実践されていると記載がある。

- 様々な参考 URL を追加し、講義中に実例として示すようにした（教授）
- スライドの色調をより見やすいものに変更し、ムービーを追加した。また 現実におこっているケースを例に 試験問題を作成した（教授）
- 授業範囲の中で物理色が強く、理解が困難な電子伝導、イオン電導が授業の前半にあり、中間試験を受けた段階で脱落していた。これを防ぐため、中間試験を小テスト（10%）に変更し、期末試験に備えさせるための訓練という位置づけにした（教授）
情報基礎演習1において、平成20年度第1回理工学部・工学系研究科FD講演会「LMS ことはじめ」および「はじめてみませんか？E-ラーニング」で紹介のあった、LMS (Learning Management System)を利用した演習を実施した（教授）
- わかりやすく実験を行ってもらうために、テキストを新たに作成し直した（准教授）
- 前年度までに作成していたパワーポイントファイルを改善した（准教授）
- 演習を自宅学習とし、余った時間で演習の解説をより詳細に行った（教授）
- わかりやすく講義を行うためにパワーポイントファイルを作成し、それを利用しながら講義を進めた（准教授）
- 共同で講義を行っている教員と相談して、演習のやり方を前年度から大きく変更して、講義時間内に演習と答え合わせを行うことにした（准教授）
- 授業で取り扱う範囲で教科書に掲載してある問題の全回答例を作成し、学生に難解な部

分を示し、自分でとけるようにした（教授）

3.1.3. 教育研修・FDに関する事項

教育研修・FDについて、工学系研究科各専攻の教員は次の活動を行っている。

【数理学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、

- 工学系研究科FD報告会（教授、准教授）
- ティーチング・ポートフォリオワークショップ（教授）

への参加が報告されていた。

【物理学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、

- 多様なFD関連後援会に多くの教員が参加している。
- 一部の教員は、これらを主催している。

【知能情報システム学専攻】

- 本専攻の教授、准教授、講師は全員、毎年、何らかのFD活動を行い、それを専攻内会議において報告している。

等が報告された。

【循環物質化学専攻】

- 学科に教育プログラム委員会及び教育FD委員会を設置し、授業改善について議論した（教授、准教授、助教）
- 基礎科目の補習ができるように演習問題とヒント、解答を載せたe-Learningシステムを構築した（教授、准教授）
- 佐賀大学FD・SDフォーラム、理工学部・工学系研究科FD講演会参加（教授、准教授、助教）
- JABEE審査委員（准教授）
- 情報リテラシ・情報セキュリティ講習会参加（教授、准教授）

【機械システム工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他、

- 専攻・学科内に設置した教務グループによるJABEE推進対応、学部および大学院の教務関連事項の検討
- 学部FD講演会への参加

【電気電子工学専攻】

専攻内でのFD活動

- チューター制により年2回（每学期初め）の個人面談にて履修と単位取得状況のチェックや修学上の相談（全教員）
- 教育改善委員会（毎月1回1.5時間程度）、科目別グループ会議（毎月1回0.5時間）

程度)、カリキュラム検討委員会(毎月1回1.5時間程度)、JABEE委員会(毎月1回1.5時間程度)、学生実験委員会(毎月1回1.5時間程度)にて定期的に教育改善等について議論(教授、准教授、講師、助教)

専攻内でのFD活動の他に、以下を実施した。

- 工学系研究科FD報告会に参加(教授、准教授、講師)。
 - 高等教育開発センターや教養教育運営機構が主催したFD講演会に参加(准教授)
 - 大学電気系教員協議会及び大学電気工学教育研究集会に参加(准教授、講師)
 - テーミングポートフォリエ研修会に参加(准教授)
- が報告されていた。

【都市工学専攻】

専攻内でのFD活動の他、

- 工学系研究科FD研修会や講演会への参加(教授、准教授)
- FD後援会(機械システムの技術者教育)(教授)
- 佐賀大学FD・SDフォーラム

への参加が報告されていた。

【先端融合工学専攻】

専攻・学科内でのFD活動の他

- FD講演会への参加(教授、准教授)
- E-learningの活用法の聴講(教授)
- 佐賀大学FD・SDフォーラムへの参加(教授、准教授)
- アドミッションセンターFDへの参加(教授)

が報告されていた。

3.1.4. オフィスアワーの設置と学生相談に関する事項

オフィスアワーの設置状況と学生相談の内容について、工学系研究科各専攻の教員は次の活動を行っている。

【数理科学専攻】

- 相談内容は学業や就職に関するものが多い(教授、准教授)

【物理科学専攻】

- 学科では卒業研究着手までの担任制実施しており、各教員は学年毎に3ないし4名の学生の担任の役割を果たしている。年度初めに学習・生活相談の面談を実施している(教授、准教授)
- 特に修学上の遅れがみえる学生については、教室会議で取り上げ情報交換し、可能な限りの対策を行っている(教授、准教授)
- 大学院生については、指導教員が担任の役割を果たしている(教授、准教授)

【知能情報システム学専攻】

- 相談内容は学修に関するものが多い(教授、准教授、助教)

- 面談での相談に加え、電子メールでの相談も多い（教授、准教授、助教）

【循環物質化学専攻】

- オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。毎学期毎に全学生に対し、チューター面談を実施している。

【機械システム工学専攻】

- 相談内容の半数以上が学修相談，以下，進路相談，生活相談の順となっている。

【電気電子工学専攻】

- 相談内容は平均すると学修相談 55%、生活相談 7%、進路相談 36%、その他 2%であり、学修相談が多い（教授、准教授）
- 卒論生、大学院生については、指導教員が相談担任の役割を果たしている
- 後援会后に主として学年担当と保護者を交えて面談を行い、修学指導を実施している（教授、准教授、講師、助教）
- チューター制により少人数対応の指導を行っている（全教員）
- 就職に関しては就職担当教授も指導している（教授）

【都市工学専攻】

- 相談内容は講義内容に関する質問や宿題の解き方などが主であるが、試験前になると試験範囲や出題に関する情報を得るために来る学生が多い。
- 年 2 回の個人面談を行っており、履修履歴と履修計画についても相談に応じている。一部の修学上の問題などは随時相談に応じ、関係教員は情報の共有化を図っている。
- 進級要件等の学生への周知徹底を図っているが、一度思い違いをすとなかなか気づかないらしく、今年度も進級できないという問題が発生し保護者との対応に苦慮した。もちろん、チューター教員は出来るだけ進級条件や卒業要件に目を配りながら面談すべきであるが、あくまでも自己責任で履修計画を立て、実施してもらうことにする。

【先端融合工学専攻】

オフィスアワーの設置と学生の訪問については、全教員が行っている。また、全教員が電子メールでの対応も含め、オフィスアワー時間以外にも対応している。内容は教務事項が多い。

3.1.5. 学生の受賞等

【知能情報システム学専攻】

- 携帯型コンピュータ端末のプログラム開発について、卒研学生が教育システム情報学会から学生研究発表会優秀賞を受賞している（准教授）

【循環物質化学専攻】

- PacifiChem2010 Student Poster Competition（指導教員：教授）
- 第 11 回佐賀大学学生表彰（指導教員：教授）

【機械システム工学専攻】

- 日本冷凍空調学会 奨励賞

【電気電子工学専攻】

- 平成 22 年度電子情報通信学会連合大会講演奨励賞（指導教員：教授）
- 平成 22 年度電子情報通信学会学生会講演奨励賞（指導教員：准教授）
- 平成 22 年度電子情報通信学会九州支部成績優秀賞（指導教員：准教授）
- 平成 22 年度電子情報通信学会九州支部学術奨励賞（指導教員：准教授）
- 平成 22 年度電気学会九州支部長賞（指導教員：教授）
- 2010 年 IEEE 福岡支部学生研究奨励賞（第 10 回）2 件（指導教員：教授）
- 電気関係学会九州支部連合大会発表賞（指導教員：講師）

【都市工学専攻】

- 土木学会 平成 22 年度土木学会西部支部 研究発表会優秀講演賞 2 名
- 2010 年度日本コンクリート工学協会九州支部長賞 2 名
（指導教員：教授、准教授）
- 2010 年度日本建築学会 九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 都市住宅学会九州支部 2010 年度優秀学生賞 1 名
（指導教員：教授）
- 2010 年度日本都市計画学会九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 支部共通事業・日本建築学会設計競技 九州支部入選 2 作品 2 グループ
（指導教員：准教授）
- （社）空気調和・衛生工学会 第 25 回振興賞学生賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 2010 年度空気調和・衛生工学会 九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 平成 22 年 日本都市計画学会 九州支部支部長賞 1 名
（指導教員：准教授）
- 平成 20 年度地盤工学会九州支部優良学生賞 1 名
（指導教員：教授、准教授）

3.2. 研究の領域

3.2.1. 著書、論文等の発表実績

過去5年間（H18.4.1～H23.3.31）の発著書、論文等の発表実績を表3.2に示す。

表3.2 過去5年間（H18.4.1～H23.3.31）の発著書、論文等の発表実績の平均値

専攻	職種	著書	論文総数		和文原著		英文原著	
				査読付		査読付		査読付
数理科学専攻	教授	0.71	8.14	8.00	0.00	0.00	8.14	8.00
	准教授	0.00	2.67	2.00	0.33	0.00	2.33	2.00
物理科学専攻	教授	0.13	12.13	9.88	1.75	0.13	5.50	4.88
	准教授	0.17	13.67	13.00	0.00	0.00	11.33	11.00
知能情報システム学専攻	教授	1.67	34.50	22.00	8.67	7.33	16.83	9.83
	准教授	0.71	23.57	11.43	13.71	3.29	7.29	7.00
	助教	0.00	1.00	0.75	0.25	0.25	0.75	0.50
循環物質化学専攻	教授	0.70	19.30	19.00	1.10	0.80	19.40	19.40
	准教授	0.14	14.86	11.57	1.14	0.29	13.71	11.29
	助教	0.50	4.50	4.00	1.00	0.50	3.50	3.50
機械システム工学専攻	教授	1.14	21.14	21.14	2.29	2.29	18.86	18.86
	准教授(講師含)	0.67	23.83	21.33	3.00	3.00	20.83	8.33
	助教	0.00	9.80	6.40	4.12	1.72	5.68	4.48
電気電子工学専攻	教授	1.00	34.75	33.75	6.25	6.25	28.50	27.50
	准教授(講師含)	1.30	18.00	15.50	2.80	2.60	12.40	12.40
	助教	0.33	9.33	9.33	2.33	2.33	6.67	6.67
都市工学専攻	教授	0.63	22.50	14.88	9.13	4.88	13.38	10.00
	准教授(講師含)	1.18	14.18	8.18	8.36	3.00	5.82	5.18
	助教	0.00	19.00	10.50	14.25	5.75	4.75	4.75
先端融合工学専攻	教授	0.80	31.90	30.80	2.60	2.40	29.30	28.20
	准教授(講師含)	1.75	36.75	33.63	4.75	3.50	31.75	30.13
	助教	0.00	9.00	8.00	3.67	3.33	5.33	4.67

【数理科学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は非常に活発である。全員が国内外の一流雑誌に論文を掲載している。
- 准教授の研究活動は活発である。教授とそれほど遜色なく研究を行なっている。

【物理科学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

分野間や研究形態の違いにより、発表論文数にはばらつきがあるが、いずれの場合も

- 教授の研究活動は概ね良好におこなわれていることが窺い知れる。
- 准教授の研究活動は概ね良好な研究活動が行われていることが窺い知れる。

【知能情報システム学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授、准教授の研究活動は順調であり、成果を上げている。
- 助教の研究活動は、停滞していると言わざるを得ない。研究活動を論文の数だけで短絡的に結論づけることはできない。研究分野によっては論文が出にくい分野もあるだろう。しかし、表の数値が5年間の総件数であることを考えると、助教の研究活動に問題がないとは言えない。

【循環物質化学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は非常に良好であり、5年間に一人平均 19.00 編の査読付き論文を報告している。
- 准教授の研究活動は非常に良好であり、5年間に一人平均 11.57 編の査読付き論文を報告している。
- 助教の研究活動は良好であり、5年間に一人平均 4.00 編の査読付き論文を報告している。

いずれの教員とも、主として査読付き英文論文を報告しており、国際的水準にある研究活動を行っていると思われる。

【機械システム工学専攻】本表より、教授、准教授・講師、助教ともに概ね良好な研究活動が行われていると評価できる。

【電気電子工学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は、論文総数が年平均 5.9 編であり、大半が審査付であり英文原著が多いことから伺えるように優れている。
- 准教授の研究活動は、論文総数が年平均 3.6 編であり、大半が審査付であり英文原著が多いことから伺えるように優れている。
- 助教の研究活動は、論文総数が年平均 2.1 編であり、すべてが審査付であり英文原著が多いことから伺えるように優れている。

【都市工学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授の研究活動は非常に活発である。二人の論文数が際立って多いために教授全体の論文数の平均値をかさ上げしていることにも起因しているが、すべての教授が平均年 2 編以上論文を発表している。審査付論文の割合は 66%で、准教授 58%、助教 55%と比較し大きい。英文の割合も教授が約 60%と准教授の 41%、助教の 25%と比べて大きいことがわかる。このことは、教授は多忙にもかかわらず、国内や国外で開催される国際会議に積極的に参加し、自らあるいは博士課程前期課程や後期課程の学生を指導しながら審査付論文を書くように努力していることを示している。
- 准教授の研究活動は個人によるバラツキが極めて大きい。建築デザイン分野の教員は設計や作品を発表することが多く、論文数だけで評価すると過小評価され、不利な立場に立たされることになる。さらに、担当科目数（コマ数）が最も多く、研究する時間を確

保できていないのではないかと危惧される。

- 助教の研究活動は非常に活発である。准教授は年平均 2.8 編の論文を発表しているが、助教の場合はそれを上回る年平均 3.8 編発表している。気がかりなのは、審査付論文の割合が 55%と低いことである。
- 全体的に、①トップクラスのジャーナルへの投稿が極めて少ない（リスクを避ける傾向が強くなっている）、②主著者が誰か（誰が最も貢献したか）にはこだわらず、論文の数を問題にする傾向が強い。これは評価に論文の質（難易度や引用数）と著者の貢献度という視点が欠落しているためだと考えられる。

【先端融合工学専攻】本表より、全体的に以下の点が窺い知れる。

- 教授は5年間で平均 30.8 件の査読付き論文を発表している。
- 准教授は5年間で平均 33.6 件の査読付き論文を発表している。
- 助教は5年間で平均 8.0 件の査読付き論文を発表している。

3.2.2. 共同研究などに関する活動実績

【数理学専攻】

- 韓国の複数の大学教授との共同研究（教授 2 名）
- 中国科学院ほか中国の大学教授との共同研究（教授）

【物理学専攻】

- 強強度陽子加速器(JPARC)での中性Kメソン稀崩壊の研究（教授）
- Bメソン崩壊におけるCP対称性の破れの研究（B e l l e 国際共同実験）（教授）
- 擬一次元物質 K0.3MoO3 の低温 STM/STS 観察（准教授）

【知能情報システム学専攻】

- 民間企業との「ワンセグ放送とストリーミング技術および位置情報サービス連動に関する研究と実証」に関する共同研究（教授）
- （独）産業技術総合研究所との「A S T E R V N I R, S W I R の代替校正」に関する受託研究（教授）（研究費：210 万円）

【循環物質化学専攻】

- 工学系研究科長経費 研究活性化事業「中期計画推進経費」に専攻より 2 件採択（教授、准教授、助教）
- 他大学との共同研究 27 件を実施（教授、准教授）
- 民間企業との共同研究を 10 件受け入れた（教授、准教授）
- 市・県、財団法人、民間企業からの受託研究を 8 件受け入れた（教授、准教授）
- 環境省と文部科学省の外部資金を獲得（教授、准教授）
- 科学研究費補助金に 10 件採択（教授、准教授、助教）

その他、委任経理金受入に関する報告が多数ある。

【機械システム工学専攻】

- 水宇宙用基油・グリースの潤滑性能評価

- 強化メカニズム解明—破壊メカニクス解明—
- 宇宙用基油・グリースの潤滑性能評価
- 構成のギヤカップリングの開発
- 自動車関連産業参入のための Mg 合金の力学データベースの先駆的整備研究
- チタン成形性への結晶塑性均質化法の適用
- 1234ze 系混合冷媒を用いた伝熱管の性能評価に関する基礎研究
- 有限要素法を用いた精密せん断加工の高精度化に関する研究

【電気電子工学専攻】

- 琉球大学工学部、佐世保高専電気電子工学科、九州大学システム情報科学府との共同研究（講師）
- 東北大学電気通信研究所共同プロジェクト研究（准教授）
- 九州工業大学大学院生命体工学研究科と共同研究（准教授）
- 国立極地研究所と共同研究（准教授）
- 安川電機と共同研究（准教授）
- 日本電波工業（株）と共同研究（講師）
- 豊田中央研究所と共同研究（講師）
- 財団法人九州産業技術センターの委託研究（教授、准教授）
- 科学技術振興機構(JST)戦略的創造研究推進事業 さきがけ（准教授）

【都市工学専攻】

- 受託研究 『みんなでワイワイ！身近な水路と歴史を楽しめる『私たち佐賀のまちなか居住モデル』の提案』（准教授、助教）
- 受託研究：佐賀城内の水循環の可能性に関する調査、研究（教授、准教授、助教）
- 文部科学省の研究推進事業：異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業「被災と被災後の『二重の生活危機』を最小化する災害弱者のための地域防災研究」（教授、准教授）
- 国内共同研究 『嘉瀬川ダム研究』（准教授）
- 若手研究者支援経費： 化学的地盤改良における長期強度特性に関する検討
- ～地盤環境の変化と固化材の種類と配合量の影響～ （助教）

【先端融合工学専攻】

- 日常生活動作に基づく人工関節運動シミュレータの開発（教授、共同）（外部資金：2,421千円）
- 海洋温度差発電プラントのインターネットを用いた遠隔制御システムの開発（教授、科研C）（外部資金：1,300千円）
- 科研費分担
- 計算解剖モデルの診断・治療の融合的支援応用（教授）（外部資金：1,105千円）
- 立体的心筋細胞構造体による心機能の再生（教授）（外部資金：11,180千円）
- 超音速ノズル内の衝撃波構造におけるヒステリシスおよび非対称現象の解明（教授）（外

部資金：100 千円)

3.2.3. 受賞等の実績

【知能情報システム学専攻】

- Sebelas Maret University から Keynote Speech Award を受賞 (教授)
- Vinh University から Keynote Speech Award を受賞 (教授)
- 教育システム情報学会から学生研究発表会優秀賞 (准教授)

【循環物質化学専攻】

- 溶液化学研究会より溶液化学研究会学術賞 (准教授)

【機械システム工学専攻】

- Best Presentation Paper Award
- JACM Fellows Award
- 日本材料学会優秀講演発表賞
- 第 28 回軽金属奨励賞 軽金属学会

【都市工学専攻】

- 日本ヒートアイランド学会より最優秀論文発表賞 (講師)
- 都市住宅学会より 2010 年都市住宅学会賞 業績賞 (准教授)

3.3. 国際・社会貢献の領域

3.3.1. 国際交流実績

【数理学専攻】

- 工学系研究科国際パートナーシップ主催（教授）

【物理科学専攻】

- 工学系研究科国際パートナーシップ講師（教授、准教授）
- 海外からの研究者の受け入れ（教授、准教授）
- 留学生の受け入れ（教授）

【知能情報システム学専攻】

- 英語によるホームページを開設している（教授2名、准教授1名、助教2名）
- 各種国際会議プログラム委員、査読委員（教授1名、准教授2名、計13件）

【循環物質化学専攻】

- 工学系研究科国際パートナーシップ講師（教授）
- 海外研究者の受け入れ（教授、准教授）

【機械システム工学専攻】

- 国際パートナーシップ講師
- 国際学会の Committee
- 国際会議開会の運営委員，実行委員など
- 海外からの研究者の受け入れ
- 留学生の受け入れ
- 国際会議における発表等
- 外国語によるHPの開設

【電気電子工学専攻】

- 工学系研究科国際パートナーシップ講師（准教授）
- 国際学会等の参加・講演（教授、准教授、講師、助教）

【都市工学専攻】

- 工学系研究科国際パートナーシップ講師として受け入れ（教授、准教授）
- 国際的研究プロジェクト（中国）への参加（教授）
- 国際研究ワークショップ（韓国）における招待講演（准教授）
- 環黄海プログラムとして中国・浙江大学及びタイ・タマサート大学より教員と大学院生の受け入れ
- 環黄海教育プログラム（韓国）への院生引率参加および講義（准教授）
- 学位審査員の受け入れ（教授）
- 客員研究員の受け入れ（教授）
- 海外からの研究者・院生の受け入れ（教授、准教授）

【先端融合工学専攻】

- 英語によるホームページ開設（教授、複数）
- 工学系研究科国際パートナーシップ講師（教授、准教授、複数名）

3.3.2. 社会貢献実績

【数理学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文誌編集委員（教授）
- 日本数学会分科会代表幹事（教授）
- 佐賀県高校教員との交流会（教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授）
- 佐賀市立図書館での講演会（教授）

【物理学専攻】

- 佐賀県主催の協議会等の委員（教授）
- ジョイントセミナーおよび現職教員等実習指導（准教授 2 件、教授 1 件）
- SSH 理系ガイダンス（教授）（致遠館高校）
- 佐賀県高等学校理科実習教諭等研修会講師（教授）
- 高エネルギー加速器研究機構放射線安全審議委員会委員（教授）
- 佐賀県スーパーサイエンスハイスクール運営指導運営委員会（教授）
- 九州大学大学院アドバイザーコミッティー委員（准教授）
- 市民向け講演会 企画・実施（教授）

【知能情報システム学専攻】

- 情報処理学会九州支部評議委員（准教授）
- 電子情報通信学会英文論文誌編集委員（准教授）
- 日本リモートセンシング学会査読委員（教授）
- 画像電子学会誌査読委員（教授）
- 情報処理学会論文誌査読委員（教授、准教授）
- 日本教育工学会論文誌査読委員（教授、准教授）
- Journal of Computational Science on Scientific Computation Methods & Applications 査読委員（准教授）
- 電子情報通信学会英文論文誌査読委員（准教授）
- 高校生向けジョイントセミナー（教授 2 名、准教授 4 名）
- 人工頭脳工学研究会主催講演会講師担当（助教）
- 情報処理学会主催講演会企画委員（准教授）
- 九州テレコム振興センター委託事業のコーディネータ（教授）
- 佐賀県電子入札開発審査委員会委員（教授）
- 武雄市学校教育 ICT 人材育成・活用事業協議会委員（教授）
- 佐賀県土木行政システム総合評価委員会委員（教授）
- 総務省フューチャースクール事業協議会委員（教授）

- 武雄市検討ポータルサイト構築・運営事業委員（教授）

【循環物質化学専攻】

- 学会評議員（教授）
- 学会代議員（教授）
- 学会論文査読委員（教授、准教授）
- 学会論文誌編集委員（教授、准教授）
- 学会研究会幹事（教授）
- ジョイントセミナー講師（教授、准教授）
- 学会開催の実行委員、運営委員など（准教授）
- 佐賀県理科・化学教育研究発表会実行委員・講師（教授、准教授）

【機械システム工学専攻】

- 学会理事
- 学会常務理事
- 学会評議員
- 学会校閲委員，編集委員，運営委員
- 学会九州支部理事，評議員，商議員，常議員など。
- 研究会会長，幹事など。
- 学会開催の実行委員，運営委員など。
- ジョイントセミナー
- スーパーサイエンスハイスクールの講師
- ものづくり技術者育成講座の講師
- 産学官連携機構による技術相談派遣

【電気電子工学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授、講師）
- 学会研究会専門委員（講師）
- SPP 事業報告責任者（准教授）
- 小学生土曜講座講師（准教授）
- 工業高等学校ハイスクールプランニングの統括（教授）
- ジョイントセミナー（教授、准教授、講師、助教）
- 九州地域戦略産業イノベーション創作事業研究会担当（教授、准教授）
- 企業の課題と状況相談報告責任者（准教授）
- ロボット・エレクトロニクスものづくり体験教室指導（准教授）
- 六角小学校による見学会（助教、准教授）

【都市工学専攻】

- 学会論文査読委員（教授、准教授、助教）
- 学協会論文査読委員（教授、准教授、講師）
- 学会研究会幹事（教授、准教授、講師）

- 佐賀県、佐賀大学主催の講習会・研修会の講師（准教授）
- 産官連携事業の教員派遣で(株)中山鉄工所で講習会の講師（教授）
- 協会主催（佐賀県土木建築技術協会）の講習会・研修会の講師（教授、准教授）
- 学会幹事・評議員・商議員（教授、准教授、助教）
- ジョイントセミナー、SSH（教授、准教授、講師）
- 学会・シンポジウム開催の実行委員、運営委員など（准教授）
- 市民向け講演会などの講師担当（教授、准教授、助教）
- 国、県、市長村の各種委員会・審議会の委員（教授、准教授、助教）

【先端融合工学専攻】

- 学会論文査読委員（教授，准教授）
- 学会の役員，運営委員，幹事など（教授，准教授）
- 佐賀県主催の協議会等の幹事，運営委員など（教授）
- 佐賀県の審議会の審議員（教授）
- ものづくり講座講師（教授，准教授）
- ジョイントセミナー（教授，准教授）
- 学会開催の実行委員，運営委員など（准教授）
- 研究指導，技術指導など（教授）
- 国際学会委員（教授）

3.4. 組織運営の領域

【数理学専攻】

- 工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授）

【物理学専攻】

- 教育研究評議会評議員（教授）
- 教養教育運営機構機構長（教授）
- 高等教育開発センター・副センター長、運営委員、協力教員、併任教員（教授）
- 大学評価委員（教授）
- 入試システム専門委員（教授）
- 研究科長補佐（教授）
- 物理学科学科長・物理学専攻主任（教授）
- 理工学部・工学系研究科各種委員の担当（教授、准教授）
- 学科内各種委員の担当（教授、准教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授）

【知能情報システム学専攻】

- 工学系研究科各種委員の担当および全学委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（教授、准教授、助教）

【循環物質化学専攻】

- 高等教育開発センターセンター長（教授）
- 総合分析実験センターセンター長（教授）
- 大学教育委員会副委員長（教授）
- 大学教育委員会FD専門委員会委員長（教授）
- 大学教育委員会ポートフォリオ専門委員会委員長（教授）
- 工学系研究科副研究科長（教授）
- 工学系研究科連携大学院運営委員会委員長（教授）
- 工学系研究科安全委員会委員長（教授）
- 教養教育運営機構副機構長（教授）

【機械システム工学専攻】

- 理工学部各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）
- 美化デーなどの活動に積極的に参加（全教員）

【電気電子工学専攻】

- 各種全学委員の担当（教授、准教授）
- 理工学部・工学系研究科各種委員の担当（教授、准教授、講師）
- 学科各種委員の担当（全教員）

- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（全教員）
- 美化デーなどの活動に積極的に参加（全教員）
- シンクロトロン応用研究センターセンター長（教授）

【都市工学専攻】

- 工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 法人本部と工学系研究科・理工学部運営補佐（3名の教授）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（准教授、助教）

【先端融合工学専攻】

- 工学系研究科各種委員の担当（全教員）
- 省エネ、省資源などの活動に積極的に参加（准教授、助教）

4. 教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

4.1. 各領域における自己点検評価点ならびに達成度

教員の総合的活動状況として、教員個人から自己点検された評価の各領域における評価点ならびに達成度の最小値と最大値をそれぞれの専攻の教授、准教授、講師、助教について整理したものが下記の表 4.1 である。

表 4.1 教員自身による自己点検評価（評価点ならびに達成率）

専攻	職種	教育の領域		研究の領域		国際貢献・社会貢献の領域		組織運営の領域		総合評価
		評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	評価点	達成率	
数理科学専攻	教授	3-5	70-95	3-5	70-100	3-5	50-100	3-4	70-90	3-4
	准教授	4-5	85-100	2-3	20-70	1-4	5-80	3-5	75-90	2-4
物理科学専攻	教授	3-5	60-100	2-5	40-100	3-4	60-100	2-4	70-90	3-4
	准教授	3-4	80-90	3-4	80-90	2-4	30-90	3-3	0-90	3-4
知能情報システム学専攻	教授	4-5	75-100	3-5	75-100	3-5	50-100	4-5	90-100	3-5
	准教授	3-5	70-100	3-5	70-100	3-5	60-100	3-5	60-100	3-5
	助教	3-4	80-90	3-5	50-100	3-4	10-70	3-5	80-100	3-4
循環物質化学専攻	教授	2-5	50-100	2-5	60-100	2-5	70-100	3-5	50-100	3-4
	准教授	4-4	80-100	3-5	80-100	3-5	75-100	4-5	80-100	4-4
	助教									
機械システム工学専攻	教授	3-5	60-100	3-5	60-100	3-5	60-100	3-4	60-100	3-4
	准教授 講師含	3-5	60-90	3-5	65-100	3-4	50-85	3-5	50-90	3-4
	助教	3-5	70-90	3-5	70-100	3-4	70-100	3-4	70-100	3-4
電気電子工学専攻	教授	3-5	70-100	4-5	90-100	4-5	85-100	3-5	80-100	4-5
	准教授 講師含	3-5	60-100	2-5	30-100	3-5	50-100	2-5	40-90	3-5
	助教	3-4	80-90	3-5	60-100	3-4	75-90	3-4	70-80	3-4
都市工学専攻	教授	3-4	60-90	3-5	60-100	2-5	40-95	3-5	65-95	3-4
	准教授 講師含	3-5	75-100	3-5	35-100	3-5	60-100	3-5	70-100	2-5
	助教	3-5	75-100	3-5	70-95	4-5	75-100	3-4	70-90	3-5
先端融合工学専攻	教授	3-5	60-100	2-5	50-100	3-5	50-100	2-5	50-95	2-5
	准教授 講師含	3-4	80-95	2-5	40-100	3-5	60-90	2-5	70-100	3-4
	助教	3-4	60-80	3-5	60-100	2-5	40-100	3-5	70-100	3-4

表中、例えば、(3-4)は評価点、達成率の（最小数3—最大数4）を表す。

一部の専攻において助教の人数が少ないため、助教のデータは割愛した。

【数理学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

【物理学専攻】

この表から、各教員は的確な自己評価を行っていると思われる（病気療養中の教員を除く）

【知能情報システム学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

【循環物質化学専攻】

この表から、各教員は積極的な自己評価を行っていると思われる。

【機械システム工学専攻】

この表から、ほとんどの教員においてはそれぞれの職分を考慮した適格な自己評価を行っていると思われるが、一部の教員については本学および本学部の目標達成に向けた活動という観点から判断して自己総合評価が若干低いように思われる。

【電気電子工学専攻】

各教員は概ね妥当な自己評価を行っていると思われる。総合評価を4以上とする教員が約6割を占めており、また全ての教員が総合評価3以上である。

【都市工学専攻】

この表から、各教員は概ね妥当な評価を行っていると思われる。総合評価で見ると、教授ほど自己評価（平均値3.3）が低い（厳しい）ことがわかる。一方、准教授は負担の多い教育分野の評価（平均値4.1）だけでなく全ての分野で評価が高い（甘い）傾向が見られる。個人によってもかなりのバラツキがある。

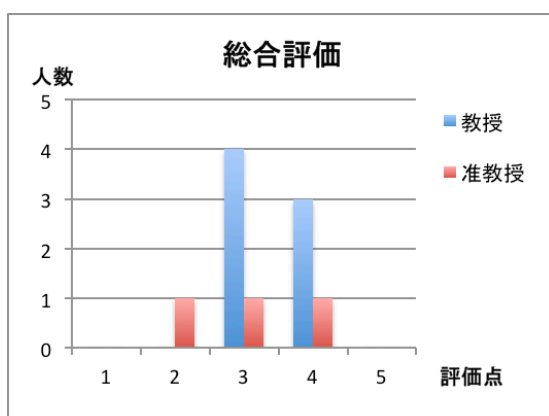
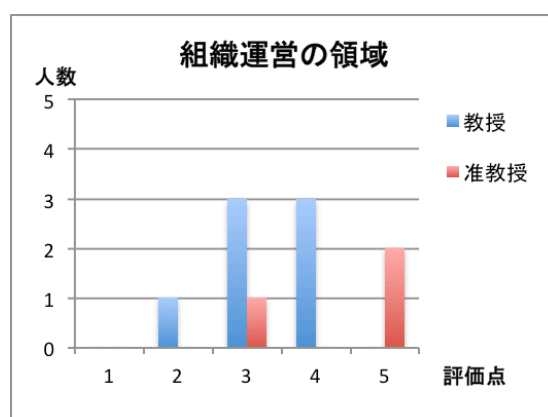
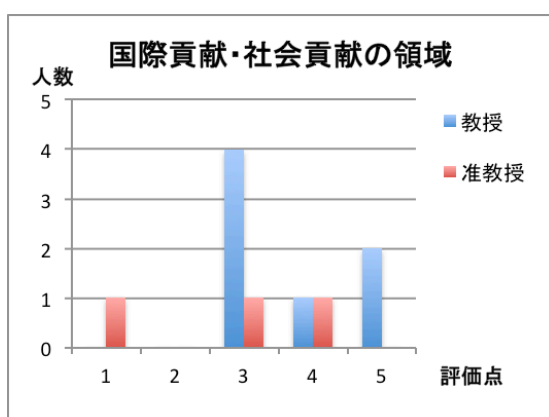
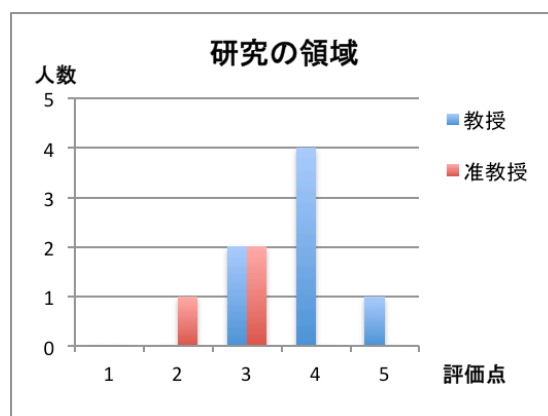
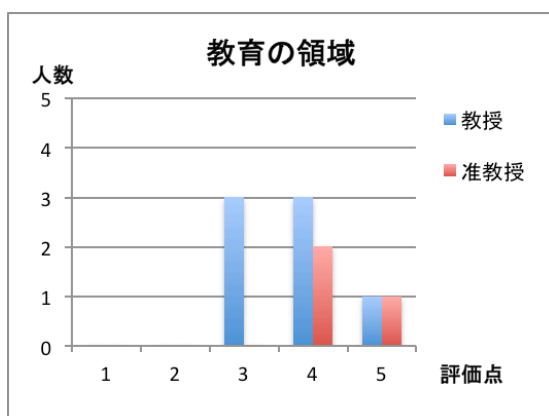
【先端融合工学専攻】

この表から、各教員は適切な自己評価を行っていると思われる。

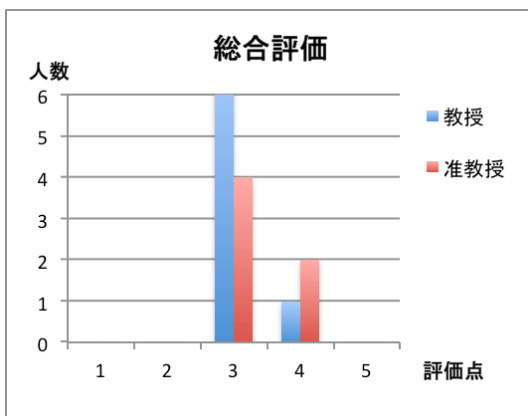
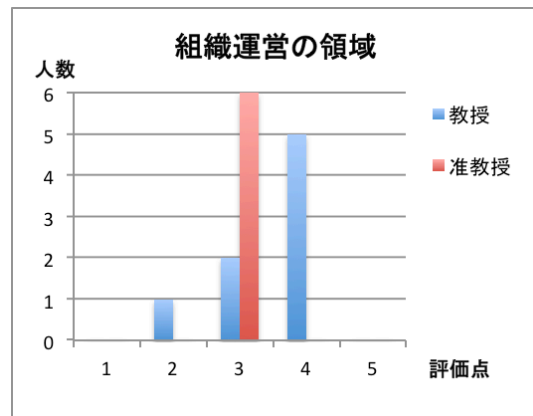
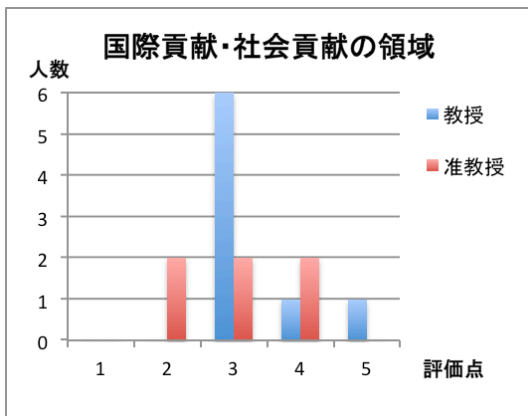
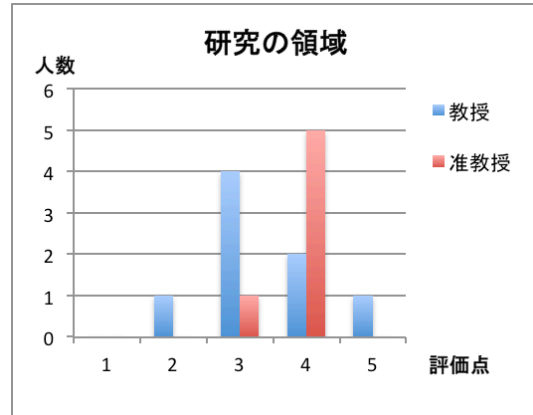
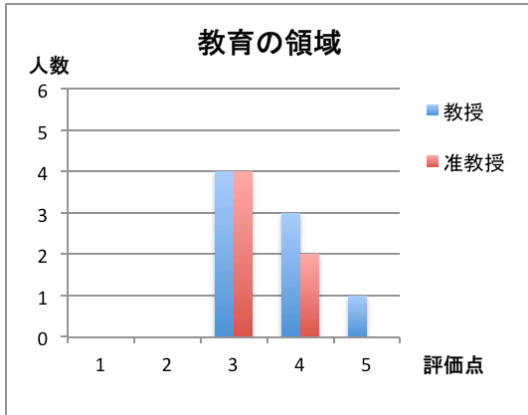
4.2. 評価領域に関する自己点検評価点のヒストグラム

以下のとおり専攻毎に各教員が自己点検した評価領域に関する評価点のヒストグラムを示す。一部の専攻で助教の任数が少ないため、助教の評価点は掲載していない。

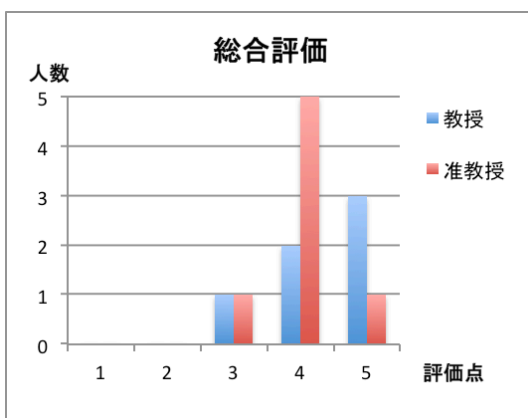
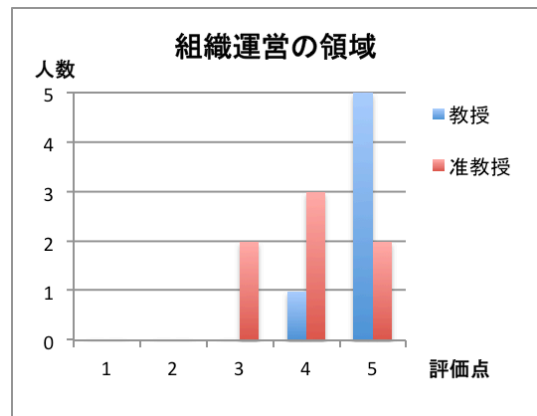
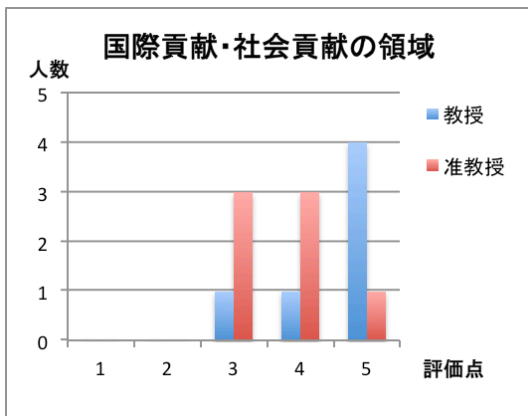
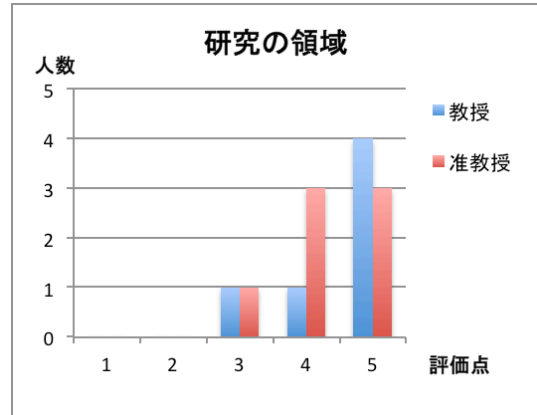
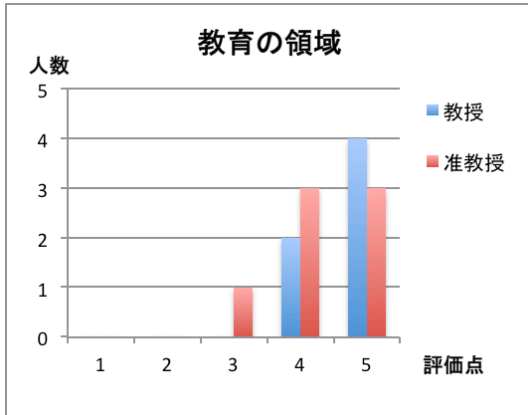
【数理科学専攻】



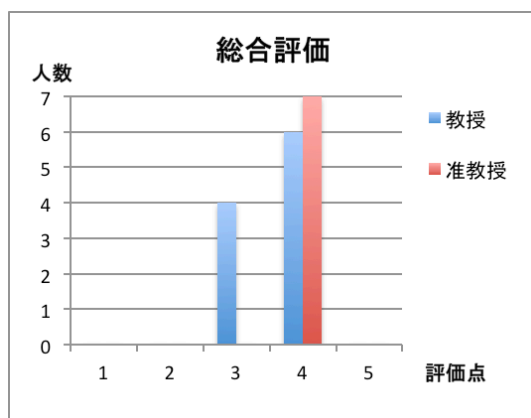
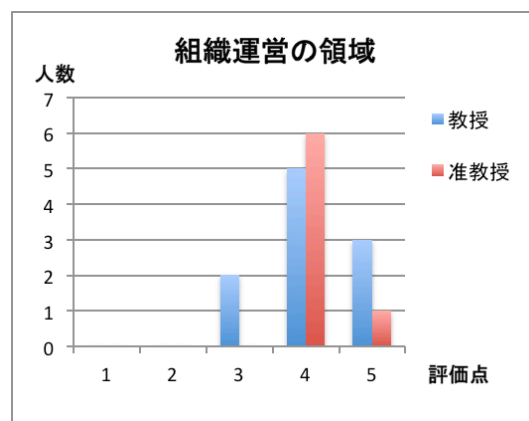
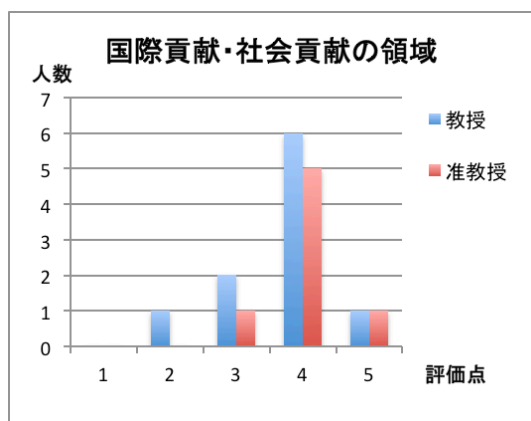
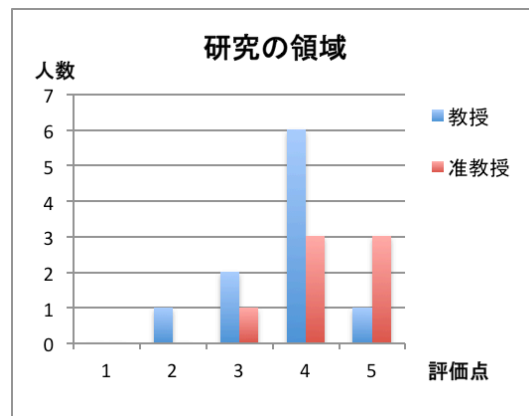
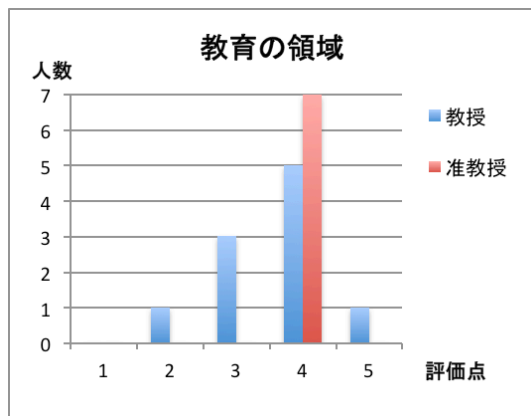
【物理科学専攻】



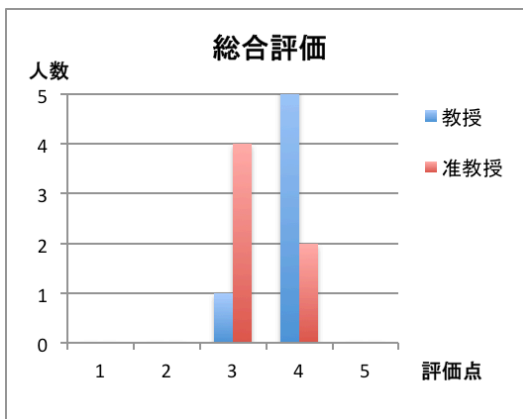
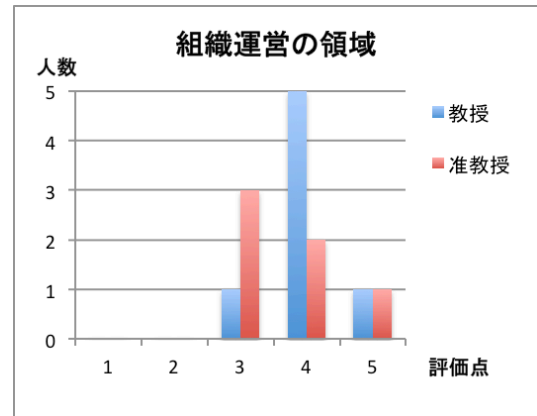
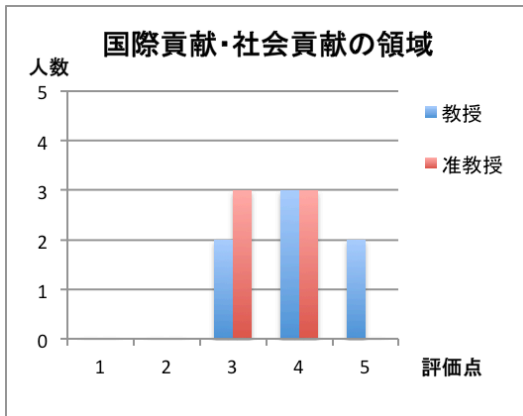
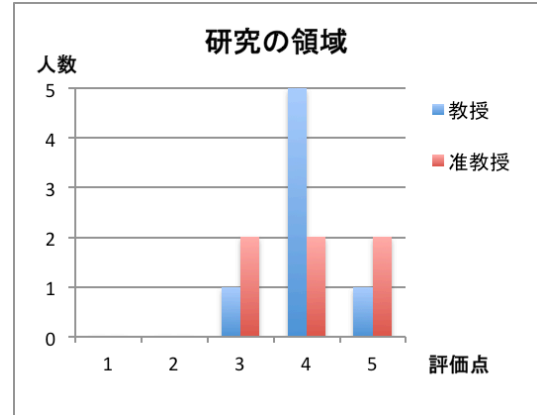
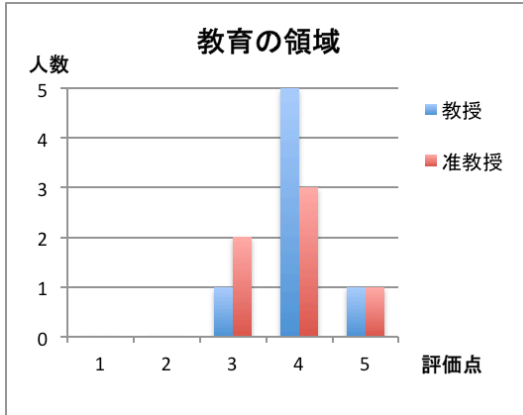
【知能情報システム学専攻】



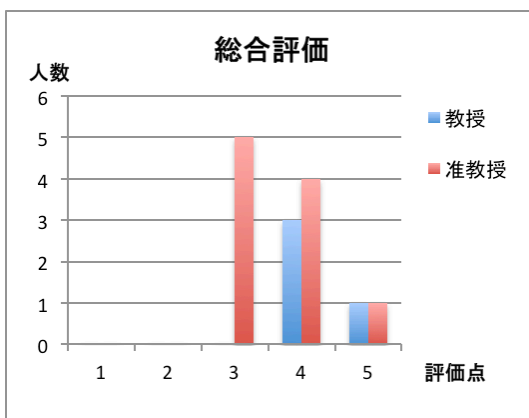
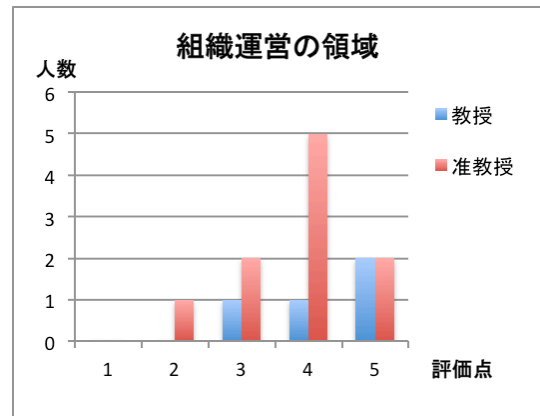
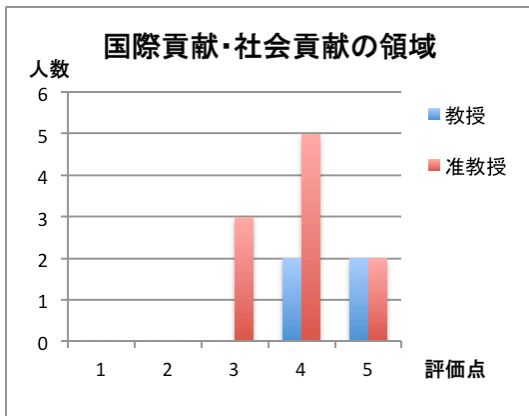
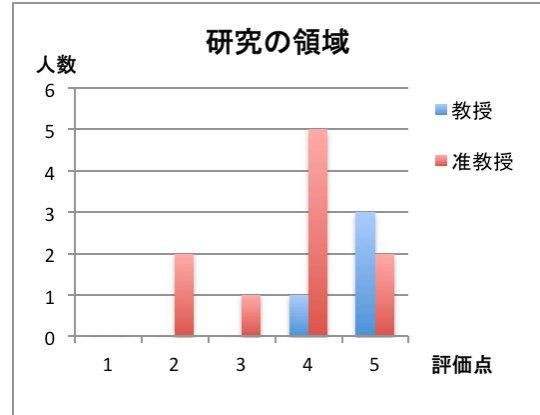
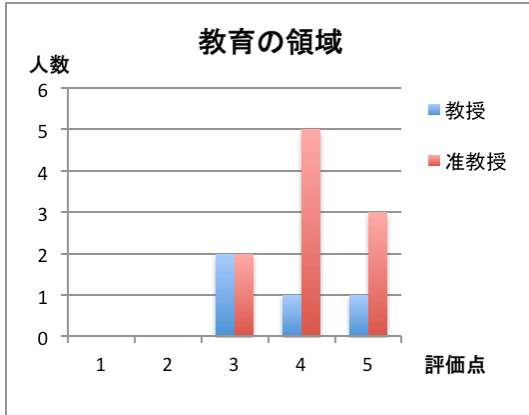
【循環物質化学専攻】



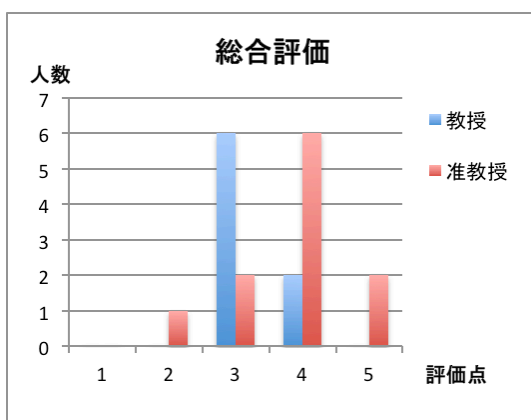
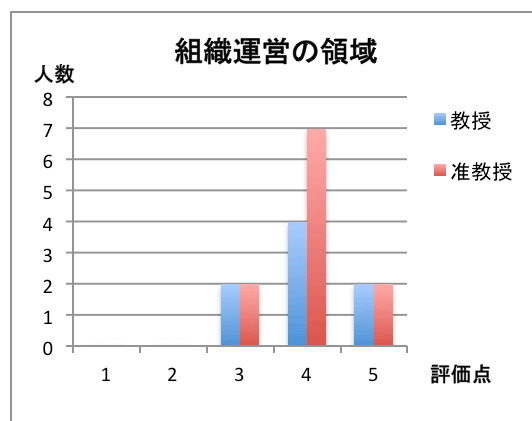
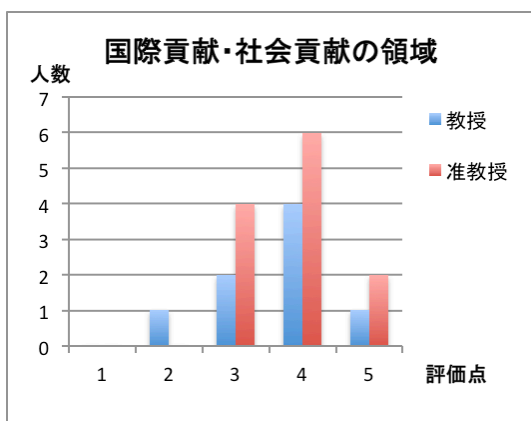
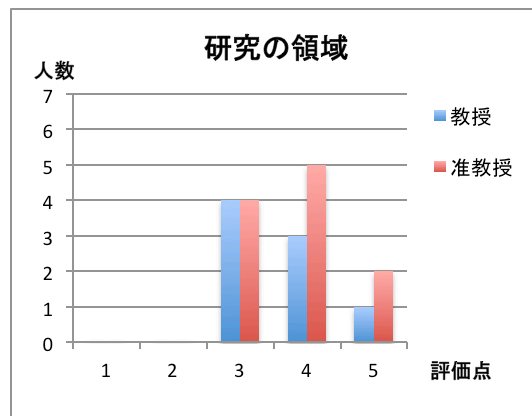
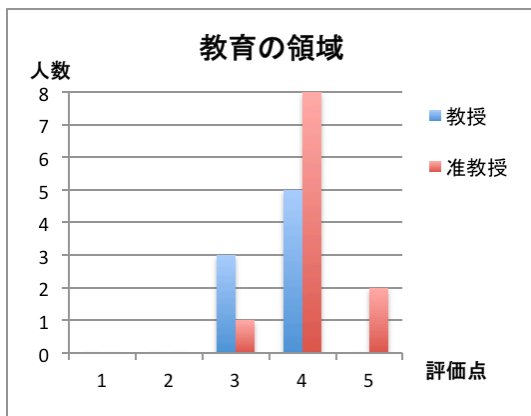
【機械システム工学専攻】



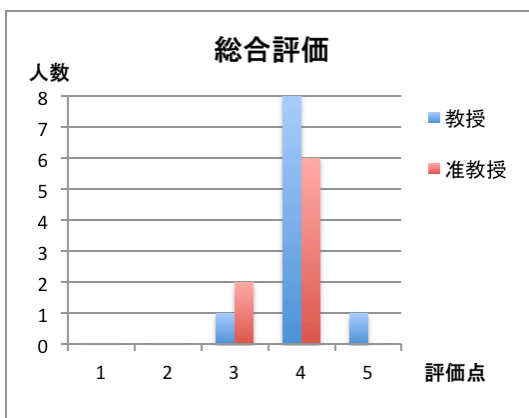
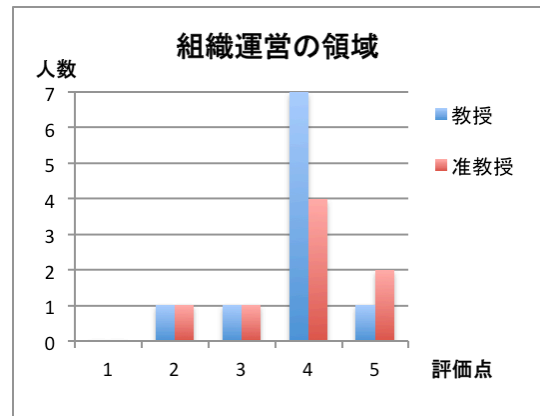
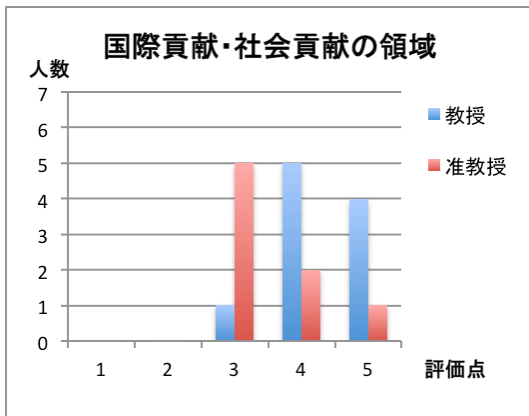
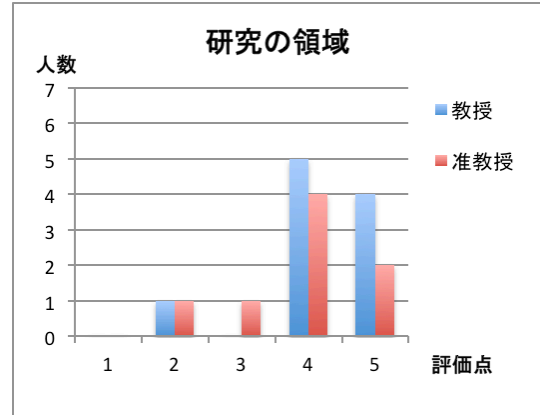
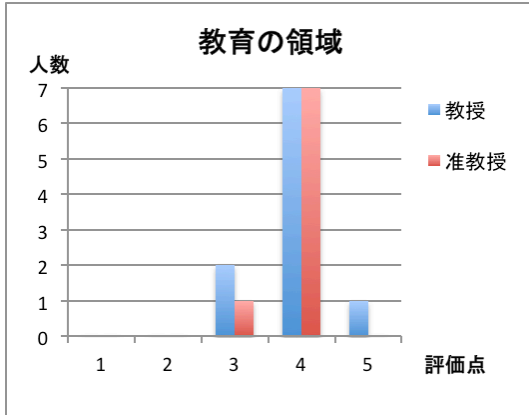
【電気電子工学専攻】



【都市工学専攻】



【先端融合工学専攻】



4.3. 評価委員からのコメント

各専攻の評価委員からのコメントを以下にまとめる。

【数理学専攻】

1. 諸外国の研究者との共同研究、各種学術雑誌での編集委員や査読、一流雑誌への掲載、科研費の獲得率（教授7名中6名が代表者として獲得）を考えると、研究の活発さが伺える。
2. 微積分特訓講座のリメディアル教育も継続して行い、学内に貢献している。
3. 高校教員との交流会も定例行事になっており、さらに高校との交流を通して地域貢献を行なっていきたい。

【物理学専攻】

1. 教育改善に関する事項については、引き続き様々な取り組みがおこなわれている。わかりやすい講義をするために、学期初めに学生の理解度を調査したり、頻繁に小テストを実施するなどして、学生の理解度を定常的に把握する努力がなされている。また、実施している教員はまだ限られるが、LMSはその有効性を認識しながら、有効な運用方法を追求しており一定の成果も報告されている。少人数教育では、一方的に教えられる形態から、自分で考える形態を授業に導入する努力がなされている。
2. 研究については、昨年同様に著名な国際学術誌に論文発表をしており、良好な実績を残している。
3. 社会貢献に関しては、例年と同様、幅広く活動をおこなっている。
4. むしろ、この報告書に象徴されるような、費用対効果比が不明な活動に割かれる時間が年々増大し、本来の教育・研究の活動を圧迫している点が危惧される。

【知能情報システム学専攻】

1. 教育の領域・講義担当における工夫では、継続的に教育効果を上げる努力が行われていることが分かる。
2. 教育研修・FD研修に参加している教員が多数いることを専攻内会議等で聞いているが、それが本評価に報告されていないと評価実施委員は感じている。次回以降の評価データ収集時に教員に周知させる必要があるだろう。
3. 助教の研究成果（論文発表数）が伸び悩んでいる問題が解決していない。組織的な取り組みが必要と思われる。研究の立ち上げには長い助走が必要な場合もあり、一朝一夕に解決する問題ではないが、だからこそ腰を据えた解決が望まれる。

【循環物質化学専攻】

1. 循環物質化学専攻では、教員個人が研究、教育、国際貢献・地域貢献、組織運営の各領域において優れた成果をあげており、専攻として優れた貢献をしていると判断できる。

2. 学部教育においてはJABEE 認定プログラムを継続し、質の高い教育を行っている。大学院教育においては、博士前期課程はもちろん、博士後期課程においても多くの学生を指導しており、着実な教育・研究成果を挙げている。
3. エコアクション等の安全管理にも当専攻は学内で先導的活動を行っている。さらに、全学センターや大学教育委員会、工学系研究科の活動に多くの教員が貢献している。

【機械システム工学専攻】

1. 機械システム工学科の教育プログラムは日本技術者教育認定機構の JABEE 認定を受けており、質の高い教育が保証・維持されている。これは教員の日々の研鑽により導かれた結果といえる。この JABEE 認定プログラムは継続的に点検・改善が必要であり、定期的に日本技術者認定機構による審査が行われる。平成 22 年 10 月に継続審査が実施され、継続の認定を受けた。これからも質の高い教育が保証・維持されていることが示されている。また、定年退職や定員削減などで教員の担当科目数が増える中、各教員が学科の目標に沿って、さらに質の高い教育を行い、学生を育成しようとする努力が見られる。
2. 大学院教育に関しては、講義での専門知識の修得に加えて、丁寧な研究指導による学生の能力の向上が図られている。
3. 研究の面では、国内外の学会などでの活発な論文発表を積極的に行うとともに、研究費については、科学研究費補助金だけでなく、共同研究や奨学寄付金、財団などの研究助成などの受け入れについても積極的に取り組まれている。これらの実績から、民間企業等が機械システム工学専攻の研究へ、高い関心を持っていることが分かる。
4. 社会貢献・国際交流では、学会等の役員および委員会委員として活動し、社会人教育のための「ものづくり技術者育成講座」の講師群も担当している。また講演会、研究会なども精力的に開催している。さらに、外国人研究者の受け入れや、国際会議における発表も積極的に行なわれている。
5. 上記 1.~4.と自己評価結果を勘案して、全ての教員は各自の活動の自己評価を適切に行なっていると判断できる。

【電気電子工学専攻】

1. 教育、研究、総合評価に関する正確なデータは年々入手しやすく、整理も容易となり掌握しやすくなっている。
2. 上記以外のデータについては入手の簡素化が望まれる。
3. 各教員は概ね妥当な自己評価を行っており、総合評価2の教員がいなくなったので改善されているといえる。

【都市工学専攻】

1. 教育について：IT ツールなど多様な手法による講義の実践が平成 18 年度から増えてきている。学生の学会発表と受賞数は概ね前年度と同様である。また、大学及び理工学部

が主催するFD活動の参加について、昨年度より改善されてはいるが、さらなる改善の余地が残されている。

平成18年度からコース制（都市環境基盤コースと建築・都市デザインコース）を導入し、それぞれの専門性を活かしながら幅広く学習することの出来るカリキュラムを実施してきたが、度重なる定削で必要な教員が補充できず、カリキュラムの変更を余儀なくされている。現在、若手教員を中心とした教育システム委員会で、4年生へのアンケート調査などを実施し、これらのデータも参考にしながら現有の定員で実施可能な新しいカリキュラムの作成に向けて動き出している。

2. 研究について：研究に関する評価方法は適切ではないと考えられる。第1著者と第3著者や第4著者では、貢献度がまったく違うにもかかわらず、同等に扱われている。一般的に第3著者や第4著者は名前だけでほとんど貢献していない場合が多いにもかかわらず、これを1編としてカウントするには抵抗を感じる。また、分野によって、成果物が異なっている。建築デザインの分野では論文を書くことはほとんどない。これらの分野では設計や作品がすべてである。建築デザインの設計や作品をどのように評価するか早急に検討する必要がある。
3. 評価基礎情報データシステムに入力することになっているが、時間が掛かるし、操作がわかりにくいなどの欠点がある。評価委員に手渡されたエクセルのファイルからは多くの情報が抜け落ちている。以前のようにエクセルに直接入力した方が、正確で蓄積しているデータを活用しやすい。エクセルファイルで集めて、処理する以前の方法に戻すべきである。

【先端融合工学専攻】

1. 教育に関しては、評価点や達成率の平均値も高く、担当科目数も他大学教員よりも多い。また、多くの教員がFD講演会に参加したりする等、教育改善に対する工夫と努力が見られる。
2. 研究に関しては、各教員が多くの研究成果を出している上、外部資金の獲得も多く、受賞実績もある。各教員の評価点や達成率の平均値も高く、十分な成果を挙げていると思われる。
3. 社会貢献・国際交流に関しては、多くの教員が国際パートナーシップに参加している上、多くの学会や地域の協議会・審議会の役員等をこなしている。評価点や達成率の平均値も高めの値であり、社会貢献や国際交流に対する理解と努力が感じられる。
4. 組織運営に関しても、全教員の積極的な関与が見られ、各教員の評価点や達成率の平均値も高い値になっている。
5. 個人評価は、各自達成目標を異にするため成果の評点を単純に比較することには無理があるが、教員はおおむね各自の活動の自己評価を適切に行っていると判断する。

平成23年度工学系研究科評価委員会委員名簿

委員長	林 田 行 雄	(研究科長)
委員	中 島 謙 一	(副研究科長・評議員)
委員	渡 孝 則	(副研究科長)
委員	船久保 公 一	(副研究科長・佐賀大学評価委員会委員)
委員	吉 野 英 弘	(佐賀大学評価委員会委員)
委員	後 藤 聡	(教務委員会委員長)
委員	宮 崎 誓	(数理科学専攻長)
委員	豊 島 耕 一	(物理学専攻長)
委員	山 下 義 行	(知能情報システム学専攻長)
委員	兒 玉 浩 明	(循環物質化学専攻長)
委員	萩 原 世 也	(機械システム工学専攻長)
委員	西 尾 光 弘	(電気電子工学専攻長)
委員	清 田 勝	(都市工学専攻長)
委員	野 口 英 行	(先端融合工学専攻長)
委員	松 尾 忠	(工学系研究科事務長)